

会議名	芦屋港活性化推進委員会（第8回）	会場	芦屋町役場 31会議室			
日時	平成30年4月26日（木） 19:00～20:30					
件名・議題	<p>1 開 会</p> <p>2 議 事 （1）プレジャーボート係留施設専門分科会 検討結果報告 （2）動線・ゾーニング案の検討</p> <p>3 その他</p>					
	会 長	内田 晃	出	副会長	小島 治幸	出
		辻本 一夫	出		林 知幸	出
		松上 宏幸	出		中西 隆雄	出
		松岡 泉	出		河村 拓磨	出
		川上 誠一	出		重岡 裕馬	欠
		根木 貴史	代		信安 一宏	出
		久保 尚亮	代		北 陽一	出
		吉瀬 幸一	出		後藤 了輔	欠
		牟田口 徹	出		小田 昭裕	欠
		山田 寛	出		須河内 美紀	出
合意・決定事項	<p>○プレジャーボート係留施設専門分科会 検討結果について報告し、了承された。</p> <p>○導入機能・ゾーニング案については、次回の委員会で機能、施設などについて議論することとなった。</p>					

平成 29 年度芦屋港活性化推進委員会（第 8 回）議事録

1 議 事

(1) プレジャーボート係留施設専門分科会 検討結果報告

○資料 1 に基づきオリエンタルコンサルタンツより説明。

【質疑応答】

[委員]

○不法係留船だけではなく、それ以外のプレジャーボート、ヨットなどの所有者の利用を含めて係留最大隻数が 200 隻という想定なのか。

⇒近隣の施設から移ってくることも想定している。報告書の P9 に今後の検討課題として記載しているが、「単なる放置艇対策のための施設ではなく、観光レジャー要素を備えた係留施設にしていく必要がある」と検討課題の中で挙げられている。したがって、委員が言われた事も考慮しての 200 隻としているが、今後の検討課題として、配置など含め再度検討したい。[事務局 (町)]

[委員]

○今回案が具体的に示されたわけだが、問題点であった砂事業者との関係においては、この係留スペースであればトラブルなどを最大限回避できると思う。この場所が一番良いと思うが、P5 で示されている図面で見ると、波除堤の突端に浮棧橋を設置する事になっている。現地の砂の堆積状況は調査しているのか。

⇒砂が堆積していることは確認しており、波除堤と浮棧橋等を作るうえでは、浚渫が必要な事は認識している。今回配置を検討するうえで浚渫も考慮して計画している。【オリエンタルコンサルタンツ】

[委員]

○今日現地を見たが、水上で係留する一番上のところ、岸壁付近などは砂浜になっている。防波堤に沿って 30～40m は水深 1m 位しかない状況で、浮き棧橋を作って浮かせるということであれば、船のキールなど含めて 3～5m の水深が必要になると考えられる。砂を 3～5m 掘るという事になると、相当な浚渫工事が必要になり財源の問題等がある。1 回掘っただけで良いものでは無く、1～2 年で同じような状況が生まれることが考えられる。維持管理費をどうするかを見ておかないと、浚渫はお金がかかってできなくなると、係留しているお客様とのトラブルになるのではないかと。反対側の防砂堤付近も設置から 10 年以上たった現在では、8 割方が砂に埋まっており、今後は効果がなくなるのではないかとこの状況になっている。このような事をもう少し調査した中で、費用負担が

どうなるかといった事も検討が必要ではないか。

⇒港湾を管理している立場の県土整備事務所としても大きな課題として認識しており、今後調査や砂が来ている原因を調べたいと思っている。プレジャーボート施設ができてからも、砂が堆積し続けるのは問題であるという認識である。最初は浚渫を計画しているが、砂がたまる原因など調査し、詳細の設計を進める時に対策を行いたい。[県土整備事務所]
⇒砂の堆積をどう止めるのか、しっかり調査と対応をお願いしたい。[委員]

[委員]

○季節風の風速は15m～20mだが、台風の場合、進路により最大瞬間風速が35mになることがある。また台風が近くを通ると水面が1m50cmくらい上がることもある。漁船はアンカーを取ってロープなどを使い台風対策を取っているが、プレジャーボート係留施設についても台風への対策が必要ではないか。

⇒30年、50年に一度発生するような強い風についても検討し、対応可能な設計にする。

[オリエンタルコンサルタンツ]

⇒資料のP9に課題として記載しているが、分科会でも同様な意見があり、課題として検討する必要があるとしてまとめている。台風は経路が比較的掴みやすいため、そういった事象が予想される場合は、あらかじめ小型船等は陸上に上げる等の運用面でクリアしたいとも考えている。いただいた意見は設計に反映させたい。[県土整備事務所]

[委員]

○漁協の漁船がある3号泊地は防波堤、消波堤がある中でも台風の際は大変な状況になる。5号泊地は斜めに1本波止を出すという事だが、台風の時などに安心して置ける場所にならないと思う。先ほどの話のように、北西の季節風の強いときなどは陸上保管を前提とした運用や周知が必要ではないか。

⇒本資料P9に記載のとおり、運用面で検討も必要と考えている。「季節風を考慮したより安全な運用を想定し、冬季のみ陸上保管するなど柔軟な対応」、としているが季節風や台風も考慮して陸上保管施設の一部を緊急時のために空けておくなど検討したい。[県土整備事務所]

[委員]

○プレジャーボート係留施設の、今後の年次計画など作っているのか。

⇒詳細設計を進め、財源確保をしっかり協議を進めて、事業化が見えてきたところで年次計画を作りたいと考えている。[県土整備事務所]

(2) 導入機能・ゾーニング案の検討

○資料2に基づき事務局（JTB総合研究所）より説明。委員長より補足説明。

[委員]

○観光協会は事務所があるレジャープールアクアシアンで観光案内やレンタサイクルの貸し出し等を行っているが、7・8月やプール期間中などの繁忙期にはプール・海水浴客が多く、一般の方の観光案内という点では利用しにくい状況となっている。観光協会は年度当初に法人化し、人員も増え、自主事業の強化等考えている。交流・賑わいゾーンに観光協会の機能を加えていただき、運営にもたずさわっていききたい。

⇒プールにある機能を、港湾内に持って行けるかもしれないというイメージか。[委員長]

⇒プールにある事務所が手狭でこれ以上人を増やせない。事務局の中でも今後観光拠点となるとところに事務所を新設し、運営したい思いがある。港湾内にできたら一番良いと考えている。[委員]

⇒今後、施設の詳細を決める際に検討できれば良いと思う。[委員長]

[委員]

○芦屋港活性化の為には、冬の期間にいかにか客を取り込むかが勝負であり、どんな全天候型の施設を作るのかが重要と思われる。子どもの遊び場、砂像展示を設けるとなっているが、まわりの環境を考えても、寒さに負け寂れている感じを受けがちと思う。施設に入ってきて、温かく感じるものを作らなければ冬を乗り越えられない。冬の間はゆったりできる、コミュニケーションを図れる、運動できる、など高齢者が時間を過ごせる、足を運んでくれる全天候型施設を考えてもらいたい。

⇒冬場に高齢者が過ごせる事を念頭に置いて検討したい。[事務局（JTB総合研究所）]

[委員]

○全天候型施設として、鳥取県にある砂の美術館のようなものをイメージしているのではないかと思われるが、機能のひとつとして今後検討すべきだと思う。また、芦屋港活性化の一番のポイントは親水ゾーンである。物流事業者が利用しなくなった後の将来案を検討するとなっているが、年次計画で何年くらいまでに物流機能をなくすかということについて、進展はあるのか。

⇒町と県で協議しているが、今の質問に対しての具体的な進展はない。引き続き課題を共有しながら協議検討はしていく。[事務局（町）]

⇒将来案を柱として取り組んで行かなければならないので、早急に詰めてほしい。[委員]

⇒今の意見をしっかり賜りながら、県と町で協議を進めたい。経過については節目で報告する。[事務局（町）]

[副委員長]

○港湾の経済的な観点で話すと、物流を本当に無くして良いのか。港湾を維持するために料金を徴収しているが、物流がなくなりレジャー港として本当に維持できるのか。

分科会では200隻位が最大でそれだと経済的に利益はほぼ出ない。物流を無くしてさらに稼げるものを例えば親水ゾーンに持ってくるなどしっかり考えなければ、港を維持できないのではないかと。

⇒試算は町でしているのか。[委員長]

⇒町では具体的に港湾でどの位利益があがっているかは把握できていない。[事務局（町）]

[委員長]

○物流の稼ぎ、それに代わる施設で稼げるのか。年間にどの位観光客が来てどの位お金を落として行くのか、運営費、イニシャルの建設費もかかる中で30年くらいのスパンでどの位の収益が出るのかという試算はするべきかもしれない。

物流が無くなる事でもっと稼げる機能ができるかもしれない、一部残る事で制限され稼ぐことができなくなるかもしれない。ここにどういう用途の施設をどれくらいの規模入れるかに関わってくる。機能によっては圏域人口がどれ位になるかも変わってくるため、試算をきちんとする必要があると考える。今年度の検討の中でそういう観点を入れながら検討する必要があると考える。

⇒今年度試算をすることを考えている。[事務局（JTB総合研究所）]

[事務局（JTB総合研究所）]

○物流機能がなくなった後、海沿いの上屋を活用すべきか、意見を聞きたい。

⇒レンガ造りの倉庫なら使うが、芦屋の上屋は利用価値ないと考える。[副委員長]

⇒リフォームという形も考えられなくはないが、現時点では議論できない。[委員]

⇒先の話になるが、検討するなら一度現状を見てから検討すべき。[委員]

⇒用途や配置など細かいことを検討する際に、使う場合使わない場合の比較をしなければ結論は出せない。[委員長]

[委員]

○里浜緑地ゾーンはこの計画が立てられる前から、芦屋海岸に飛砂対策として、県の支援でスーパー黒松など植えている。県の考え方として、港湾の活性化ということで、里浜緑地ゾーンをつくる事になった時には、今後の県の支援のスタンスは変わるのか。里浜の維持管理について、これまではある程度の期間は県が行い、その後は町がやってくれとなっていたが、変わってくるのか。

⇒今後、維持管理の整理について県と町で役割分担の話し合う事になっており、県として何ができるのか、町がどういった取組ができるのかを詰めて行く。我々は里浜事業において

は、松が無事に育ち地域の財産になるまでを目的として考えている。その目的の中で県も町に協力しながらやっていきたいと考えている。[県土整備事務所]

⇒植えた松は順調に育っているが、砂と風との戦いをしなければどうしようもない。垣根が砂と風で傷んでおり業者が補修していた。里浜緑地ゾーンも今後ボランティアなども含め松を育てる運動を作っていくことも考える必要がある。町はどう考えているのか。[委員]

⇒里浜に関しては、本年度、町と県で今後の維持管理方法を協議することになっている。松の育成、松林を育て地域の方に愛着を持っていただく活動が必要になってくる。現在は里浜実行委員会という形だが、住民を含めた運営組織を先進地で行っているので、今後そういった組織形成を図りながら啓発活動を行い、育てながら港と連携を図ってゆく形をイメージしている。[事務局（町）]

[委員長]

○それでは議論も出尽くしたようなので、今日の議事はこれで終了させていただきたいと思う。大まかなゾーニング、港があり、今、物流機能があり、P B係留という位置がほぼここでということになっているので、このゾーンについては大きく変わることはないと思う。この中でどういった機能をどう詳細に詰めて行くかが今後大きなテーマになっていくと思う。詳細を決めて行く中で、一部ゾーンの変更はあると思うが、大まかな位置関係としてはこういう形で進めて行くという事になると思われるので、次回以降、細かい用途、規模、配置の案を出すことで、より詳細にこの委員会の中で詰めて行ければ良いと思う。

[副委員長]

○細かい話だが、ゾーンの呼び名でP B係留ゾーンがあるが、P B係留施設は陸上保管の隻数が非常に多いので、係留ではなくこれからポートパークゾーンなどもう少し広い意味を含んだ用語を使ってはどうか。

⇒ゾーンの名前についても、今後中身を詰める中で相応しい名前が出てくると思われる。臨機応変に対応してほしい。[委員長]

[事務局（町）]

○次回の推進委員会では本日いただいた意見を基に特にゾーニングに関して方向性をまとめていただき、その後導入しようとする機能、施設に関して議論していただきたい。また、本委員会の設置目的にもあるとおり、芦屋港の活性化のために必要な機能の具現化を図るとともに、スピード化を図るためにより専門的に詳細の検討を行う専門分科会を新たに設置する必要があると考えており、どのような専門分科会が必要ということも議論をしていただきたい。